



営農情報

「あまおう」4月の管理

第70号 平成30年4月6日

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生育状況

2月下旬から3月中旬にかけての出荷量は昨年比120%と、昨年を上回る出荷量となりました(図1)。現在、3番果房は出荷のピークを過ぎていますが、2番果房の着果負担が大きかったことで、着色不良や肥大不足の果実が見られます。4番果房は3月中旬より出蕾が始まりましたが、開花はやや遅くなっている傾向です。

(JA福岡大城管内の3月下旬までの昨年比出荷量101%、単価105%、金額106%)

ハダニ類の多発ほ場が増加しており、アブラムシ、スリップス類の発生も散見されます。また、親株の立ち上がりが3月中旬頃から始まっています。

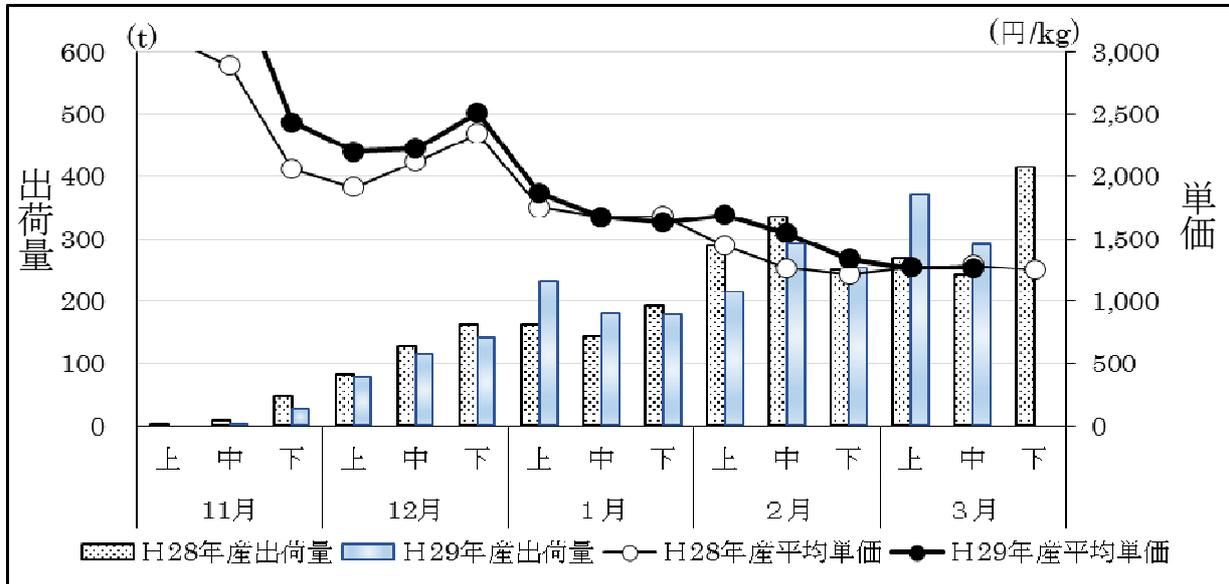


図1 南筑後普及指導センター管内のイチゴ総出荷量と平均単価の推移

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

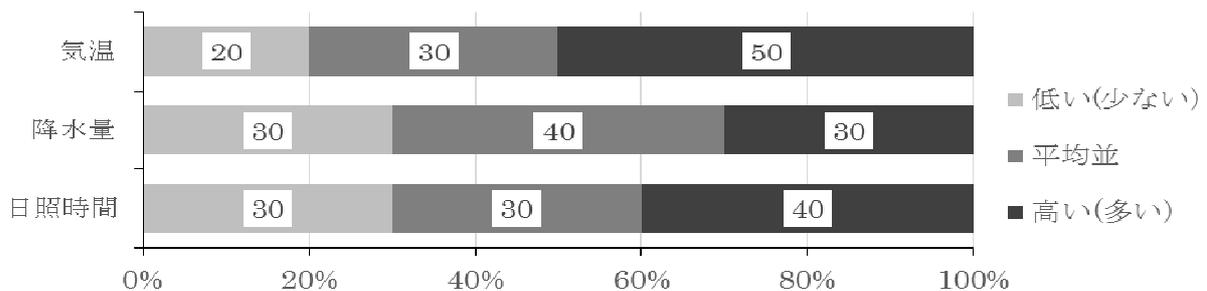


図2 1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 3月31日~4月30日 発表日 3月29日)

(2) 今後の見通し

降水量は平年並み、日照時間が平年より多い予報になっています。ハウス内が乾燥してハダニ類の発生が増加する可能性が高くなります。乾燥を防止するため、こまめにかん水を行い、適宜ハダニ類の防除を行いましょう。また、ハダニ類が多発している株は葉かきまたは株ごと除去して被害の拡大を防ぎましょう。また、親株床の乾燥によるランナーの発生遅延も懸念されるため、特に、プランター等の親株には乾燥に注意してかん水を行いましょう。

3 今後の管理

<ポイント>

◎傷み果対策

春先の気温上昇に伴い、果実の傷みが発生しやすくなります。温度管理やかん水管理など品質保持対策に取り組みましょう。

◎親株管理・育苗準備

充実した苗を作るためにも、採苗時期が遅れないようにしまししょう。親株管理、育苗準備は計画的に、早め早めの作業を行いましょう。

(1) 温湿度管理

- ・ 晴天日はサイド・谷・妻面の換気を早朝から行い、低温で管理する。
- ・ 夜温7℃以上の日は、夜間もハウスを開放したままにする（雨天日を除く）。
- ・ 降雨時は、雨が降り込まない程度にサイドや妻面での換気を行い、湿度を下げる。

表1 温度管理の目安

午前	午後	夜間
18℃～20℃	18℃以下	5℃（夜温7℃以上は開放）

(2) かん水

- ・ 1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となるため少量で回数を多く行う。
- ・ かん水後にpF値1.7～1.8を目標に行う（朝、葉つゆをうたないようであれば土壌が乾燥している）。
- ・ 果実品質維持のため、収穫直後にかん水する。
- ・ 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるハダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

(3) 株整理

- ・ 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- ・ 生育が旺盛になるとランナーが多く発生するので随時除去する。
- ・ 畝上の過湿を防止するため下葉を除去する。

(4) 日焼け果防止対策

- ・ 曇雨天日が3日程度続いた後の晴天日には、果実からの蒸散に水分供給が追い付かないので日焼け果が発生しやすい。
- ・ 曇雨天日後の晴天日は遅れないように換気を行い、急な温度上昇を防止する。

(5) 軟果・傷み果対策

- ・ 収穫遅れによる過熟を防止するため、部会の着色基準に従って収穫する。
- ・ 収穫は高温時を避け、収穫箱内での果実の積み重ねを行わない。
- ・ 収穫後は速やかに予冷し、果実を2時間以上予冷庫で冷やした後に、パック詰めを行う。
- ・ 収穫後の少量多回数かん水に努める。
(土壌水分の目安はpFメーターで1.7～1.8、軟果が多い場合は2.0程度)
- ・ 遮光資材(寒冷紗、塗布剤)を活用し、ハウス内の温度上昇を抑える。

(6) 病虫害防除

① ハダニ類

- ・ 下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ・ ハダニ類の多発した株は、特に強めに葉かぎをした後に防除をする。もしくは株ごと除去してハウス外に持ち出す。
- ・ 葉かぎしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
- ・ 気門封鎖型薬剤の卵に対する効果はほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は5～7日おきに複数回(2～3回)散布を行う。

② アザミウマ(スリップス)類

- ・ ハウス周辺からの飛び込みで特にサイド側や妻面付近に発生しやすいため注意する。
- ・ ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。

③ アブラムシ類

- ・ 発生が見られており、今後、気温上昇と共に増加する。油滴状の排泄物や幼虫の白色の脱皮がらが付き、果実の汚れなどにつながるため発生に注意し防除する。

④ うどんこ病

- ・ 夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- ・ 電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。

⑤ 灰色かび病

- ・ 多湿条件で発生が増加するため、曇雨天の前などは予防的に薬剤散布を行う。
- ・ 発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。

特集「H30年度に向けて計画的な親株管理・育苗準備」

昨年は親株から発生したランナーが例年より少ないほ場が見受けられました。その要因として、4月下旬から6月上旬にかけて降水量が平年より少なく、乾燥傾向が続いたことにより、ランナーの発生が抑制されたと考えられます。

親株からの切り離しが遅れると「炭そ病」に感染する危険性が非常に高くなります。充実した苗を作るためにも、計画的に早めの作業を行い、採苗時期が遅れないようにしましょう。



<苗づくりの目標>

- ◎クラウン径10 mm以上の良苗作り
- ◎病害虫のない苗づくり（炭そ病、ハダニ類を本ばに持ち込まない）
- ◎作型に合わせた苗作り（まず、作型を決めましょう）

（1）親株管理

① 株の整理

- ・親株の負担を軽くするため、不要な下葉および果梗（花蕾）は早めに除去する。
- ・マルチの隙間から出た親株周辺の雑草は、手作業で除草を行う。

② かん水・施肥

ランナー発生期の4～5月に乾燥すると、採苗時期の遅れや採苗本数が少なくなるのでかん水を行う。

- ・特に、プランターやポットは乾燥しやすいため、こまめにかん水を行う。
- ・土耕ほ場では排水対策用の溝を整備する。
- ・プランターやポットの場合は、4月上旬までにIB化成S1号を1株当たり5粒、5月上旬までに1株当たり5～10粒の追肥を行う。

③ 病害虫防除

<炭そ病>

- ・7～10日に1回を目安として、薬剤散布を行う。
- ・降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。
- ・発生株を確認したときは、発生株及び周辺の株をほ場の外へ持ち出し処分する。

<ハダニ類>

ハダニ類は外からの飛び込みはほとんどなく、いずれかのステージ（親株・育苗・本ば）でハダニ類発生を断ち切ることがポイント。

（2）育苗準備

① 育苗床の環境

- ・育苗床は風通しが良く浸冠水のない排水良好な場所を選定し、万全な排水対策を行う。
- ・ポットの中心間隔を18 cm程度確保できるように、育苗床は十分な広さを確保する。

② 育苗培土

- ・培養土は排水性が良く、土がしまりにくいものを選ぶ。
- ・炭そ病が発生した場合に、発病株及び周辺株を除去できるように、苗本数は3割ほど多めに準備する。

③ 鉢上げ

- ・さしポットの場合、作型に応じて目標とする鉢上げ時期（6月上中旬）までに作業できるよう、育苗ポットの準備を計画的に行う。
- ・すけポットの場合、鉢受けは5月末までに終了する目標で行う。

早めの親株管理作業で、早めの採苗を目指しましょう！